

# 弥生時代の遺跡分布

弥生時代になると、市内各地で人々が暮らしていた遺跡が35カ所見つかっています。

弥生時代前期（約2,300年前）のものとして、稲作の先進地である九州地方や東海地方の影響を持つ土器が、上敷免遺跡①、畠山館跡②で見つかります。

弥生時代中期（約2,100年前）の遺跡として、上敷免遺跡①や四十坂遺跡③の再葬墓※、住居跡が見つかった宮ヶ谷戸遺跡④、上敷免遺跡があります。



▲再葬墓（上敷免遺跡）

※再葬墓 遺体をいったん埋葬して白骨化させたあと、その骨を再び壺形土器などの容器に埋納する葬法である。土器棺を用いた再葬墓は、縄文時代晩期後半の近畿地方から東海地方、中部地方にも見られるが、弥生時代前期から中期に東海から東北地方南部に分布する再葬墓は、壺形土器を土器棺とすることに特徴がある。抜歯形式、加工人骨もほぼ同じ範囲にみられる共通した特徴があり、祖先崇拜と関連した埋葬形態であったと考えられる。

弥生時代中期の再葬墓は土坑の中に壺形土器を一個体から数個体納めることを常とする。県内の弥生時代前期、中期の再葬墓としては、上敷免遺跡、四十坂遺跡、横間栗遺跡（熊谷市）、平遺跡（神川町）などがある。県内でも深谷市を中心とした北部に主な分布域がある。



弥生時代

住居跡はいずれも2～3軒が寄り添うような形で見つかり、小さな集落を形成していたようです。水田跡などは発見されていませんが、上敷免遺跡や宮ヶ谷戸遺跡近辺では稲作を行っていたものと考えられます。

中期の終末の桜ヶ丘女子高遺跡（上野台）⑤からは、長野方面との交流を示す、栗林式土器が出土しています。

弥生時代後期（約1,800年前）のものとして、集落跡が白草遺跡（本田）⑥や明戸東遺跡⑦で見つかります。中期までの集落と比べてやや大きなまとまりとなりますが、次の古墳時代と比べればまだごく小規模な集落といえます。



▲後期の土器群（白草遺跡）